

東欧医学部に熱視線



ハンガリー国立セメルweis大で、各国から集まった医学生らと記念写真を取る浜田通果さん(前列左から3人目)＝本人提供

東欧の大学の医学部で学ぶ日本人学生が増えている。入試のハードルが比較的低く、学費と生活費を合わせても日本の私立大医学部より割安なのが主な理由だ。中でもハンガリーには、これまでに600人以上が留学。海外の医学部留学に特化した奨学金を設け、医師不足解消を目指す自治体も出始めた。女子や浪人生への差別で国内の医学部入試が揺れる中、東欧留学は「ブレイク」になるか。



ハンガリーの首都ブダペストにある国立セメルweis大6年の浜田通果さん(25)は卒業を来年に控え、寒風が吹く毎日を過ごす。日本の大学の医学部を目指したがうまくいかず、浪人しようと考えていたときに偶然、ハンガリーという選択肢を知り、留学を決めた。学生は世界各国から集まり、授業は英語で進められる。卒業後は日本に戻って医師になることを目指しており、「英語で医学を学んだ強みを生かしたい」と抱負を語った。

東欧諸国は以前から、外資獲得のために海外から医学生を受け入れてきた。現在、日本からの留学生の大半はハンガリーの四つの国立大医学部に集中。2006年から日本で留学をあっせんする企業「ハンガリー医療大学事務局」(東京都)によると、初年度に23人だった日本人留学生は、18年度には86人に増えた。

急増の背景は、日本の医学部が「狭き門」になっていくことだ。将来の高収入を期待できる医学部の人気は高く、比較的学費の安い国公立大は難関だ。私立大は6年間の学費だけで3000万円以上かかるケースが多く、平均的な収入の家庭では進学が難しい。浜田さんは「日本では医学部に入れる人が限られ、スタート地点に立つことが自体が難しい。ハンガリー留学はスタート地点に立つチャンスを与えてくれた」と話す。ハンガリーの医学部に留

「日本は狭き門」ハンガリーに13年で600人

学する場合、入試は英語、理科の筆記試験と面接がある。日本で受験でき、難易度は日本の国公立大医学部ほど高くない。9月入学で、6年間の本コース以外に、入学前に英語や理科を集中的に学ぶ1年間の予備コースも用意されている。学費は年間200万円程度で、現地の生活費や同僚事務局に支払う手数料などを合わせ卒業までに約7500万円かかるが、日本の私立大に比べれば割安だ。

一方で、入学後の教育は厳しく、進級が難しい。一般教養のない医学の専門科目だけのカリキュラムで、ストレートに卒業できるのは入学者の3分の1ほど。3分の1は中途退学してしまうという。これまで54人が日本の医師国家試験に合格し、各地で医師として働いている。防日外国人の増加などで英語のできる医師の需要が高まるとみられ、同事務局の石倉秀哉専務理事は「これからさらに留学希望者は増える」と見込む。

人口当たりの医師数が全国ワースト2位(16年)の茨城県は昨年度、都道府県としては初めて、海外留学する医学生専用の奨学金を設けた。月額15万円が支給され、支給期間の1.5倍の期間を県内で医師として働けば返済が免除される。県の担当者は「国内の大学の卒業生だけでは医師確保が難しく、海外に医師を輩い込みたい」と話している。